2023年4月　園長だより

2023年4月28日(水)
敦賀教会幼稚園　園長　有岡史季

「子ども達をわたしのところに来させなさい」
(新約聖書　マルコによる福音書10章14節より・・・4月の聖句)

「さぁ、こっちだよー、おいでー」と言うと、こちらに来てくれる子どももいますが、もちろん、来てくれない子どももいます。「えー、あっちの方が楽しそうなんだけどー」と、こっちに来ないばかりか、逆方向へ走っていくこともあります。大人としては、呼んだらすぐに来て欲しいところですが、そんな大人の事情は、子どもにはなかなか伝わりません。

以前、教会学校の夏季キャンプ(敦賀教会ではなく)で、「おーい、こっちでご飯食べよー」と私が声をかけた小学生軍団は、蜘蛛の子を散らすように逃げ回り、危うく夕飯を食べ損ねるところでした。中学生のちょっとお兄さん達、お姉さん達に「そろそろ、ゲームの時間だから、こっちおいでー」と言って、しばらく待っていると、一人だけやってきて、「みんな部屋でゲームしている」と言いました。高校生のさらにお兄さん達に、お姉さん達に「遅いからこっち来て、もう寝なよー」と言うと、まぁ、そういう年頃ということなのか、どうなのか。スタッフ総出で闇夜のキャンプ場を探し回り、複数ペアを厳重注意することになりました。そんなに自由にしたいなら、キャンプ来なきゃいいのに・・・、と内心思いましたが、でも、不自由なキャンプだからこそ、そういう行動がオモシロ楽しいんですよね、きっと。安全を管理するスタッフ側は気が気じゃありませんが、自分が参加する子どもの側なら、きっと似たようなことをしていました。

そういう子どもらしい様子と言うのは、今も昔も変わりません。イエス様の生きた時代の子ども達が特別、大人に従順で素直だったということはないでしょう。「子ども達をわたしのところに来させなさい」という4月の聖句は、イエス様の語った言葉ですが、この言葉には「イエスに触れていただくために、人々が子ども達を連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った」という事情背景がありました。つまり、話の分かる大人しか受け付けなかった弟子たちは、まだ分別のない子ども達を不適切と考え遠ざけようとした。しかし、そんな不寛容な弟子たちに対して、イエス様は「子ども達を来させなさい」と言われた。そういう展開です。でも、このイエス様の言葉を聴いて、本心から喜んだのは、子ども達自身ではなく、子ども達を連れて来た保護者の方だったと思います。「せっかく子どもを連れて来たのに・・・」という親の想いが強いですね。この4月の聖句は「すでに信仰を持っている大人が、幼い子ども達を招くイエス様の姿を見て、感動を覚えるもの」だと言えます。結局、大人視点の聖句なのだということです

ただ、この時、イエス様が招いた子ども達が、どんな様子だったのか、想像力を働かせて考えてみたいと思います。さっきも言ったように、イエス様と一緒にいたから「超絶良い子」とは限りません。母親に抱かれて泣きじゃくる子、遊びを中断され連れて来られて不機嫌な子。また、当時の中東地域ですから、乾燥する風土で外遊びをすれば、舞い上がる砂埃のために衣類や靴、と言うか草履は、きっと汚れてくすんでいたでしょう。また、ちょっと大きなお姉さん、お兄さんになると、イエス様のところに連れて来られて、恥ずかしいやら面倒くさいやら、色々思い巡らせたんじゃないかと想像します。要するに、決して、その場は、雅でもなければ、静かでも、厳かでもなかったということです。普通に賑やかで、普通に泣き声が聞こえ、普通に汚れていて、正直であり無垢な子ども達の怪訝な表情と生意気な態度が見え隠れしていたはずです。

でも、そんな子ども達を、イエス様は受け入れて、招いてくださった。良い子とか、悪い子とか。大人しい子とか、賑やかな子とか。従順な子とか、無遠慮な子とか。そういうことは全く関係なく、ただただ目の前のありのままの子ども達をイエス様は認めて、愛してくださった、と私は想像し、そう信じています。そういうイエス様の姿を「素敵やなぁ」と思っています。

敦賀教会幼稚園の基本姿勢は、そんなイエス様に倣って「ありのままを愛する」ということです。「誰がなんと言おうと、君は大事で尊い！」という揺るぎない真実を、教職員一同、伝えて参りたいと思います。どうぞ、そんな敦賀教会幼稚園を、今年度もよろしくお願い致します。

2023 年 5 月　園長だより

2023 年 5 月 31 日(水)
敦賀教会幼稚園　園長　有岡史季

「主よ、お話しください。僕は聞いております」
(旧約聖書　サムエル記上 2 章 9 節より・・・5 月の聖句)

古今東西、宗教の基本は「聞くこと」です。神様の御声を聞く、仏の説話を聞く、巫女の宣託を聞く、イタコの口寄せを聞く、などなど。人ならざるものが直接か、あるいは、人や物を通して語り掛ける、この世の理を超えた言葉に耳を傾けるのが、宗教の基本形です。自然現象の一つである「雷」も、語源を辿れば「神鳴り」というらしく、ここにも神が生み出すと信じられた轟音(＝雷鳴)を「聞く」という古代人の感性が見受けられます。

キリスト教の前身であるユダヤ教は、この「聞く」ということを極めた宗教でした。「シェマー・イスラエル」(ヘブライ語：שְׁמַע יִשְׂרָאֵל)　意味：「聞け、イスラエルよ」という宣言は、ユダヤ教の合言葉のようなもので、とにもかくにも「神様の言葉を聞け」という要請が徹底されていました(「イスラエル」とは、ユダヤ教国家の国名であり、ユダヤ教の代名詞)。キリスト教も、その伝統を引き継ぎ、神様の御言葉に耳を傾ける(＝聖書を読む＆説教を聞く)という習慣を続けています。5 月の聖句も、そんな習慣的背景があってのものです。「主」とは、神様を呼ぶ時の一般的な呼称で「しゅ」と読みます。「僕」は、「ぼく」と読んでも意味は通りますが、一応「しもべ」と読みます(なんで「しもべ」と「ぼく」が同じ漢字なんでしょうね)。

この聖句を最初に受け取ったのは、まだ幼さ残るサムエルという男の子でした。サムエルは、夜な夜な語り掛ける正体不明の声を聞きましたが、それは自分の師匠であるエリの声だと思いました。夜更けにサムエルは師匠エリの寝室を訪ねて「なんか用？」と訊きます。エリは「呼んでへん」と答えます。そんなやり取りを何度か続けるうちに、師匠エリが「それは神様の呼びかけだから」と言い、5 月の聖句を教えたのです。再び正体不明の声を聞いた時、サムエルは教えられた 5 月の聖句を、そのまま語りました。そして、更なる「主の御言葉」を聞くことになります。

この「更なる御言葉」と言うのは、一聴して不穏なものでした。全然、良い話じゃなかったということです。ただ、しっかりと傾聴し、吟味し、表面的な意味の下にある、奥深い真意を探ることで、神様の不穏な言葉は、少しずつ未来を展望できる明るさを持つようになりました。神様の言葉を聞く時は「傾聴」と「吟味」が不可欠です。サラッとだけ聞いて、理解したつもりになるのが、実は一番アブナイし、カナシイ・・・。でも、それは人間関係においても一緒ですよね。

「言葉」というものは基本的に「欠損した情報」です。私たちの頭の中にあるウネウネ、コロコロした、まさに「筆舌に尽くし難い」思考と感情を、「言葉」という圧縮パッケージに入れて、私たちは発信しています。考えや思いは「言葉」にした時点で、圧縮・短縮・簡素化されて、何かしら欠けているものです。ちなみに、そういう風に「欠ける」ことが許されない場合、保険契約書とか使用許諾書とか法律文とか哲学書みたいな超絶難解で長たらしい記述(口述)が必要になってきます。でも、日常生活で法律文みたいな会話って、まぁ、無理ですよね・・・。だから、私たちは「欠損した情報」をやり取りしていることを前提に、コミュニケーションを取らないといけません。人に対しても、神様に対しても、です。そこで、重要なのが「傾聴」と「吟味」というわけです。「深読み」と表現される受け止め方は、これは自分の願いや都合が反映された受け止め方なので推奨はしません。大事なのは、相手の立場に立って、耳を傾け、受領した言葉を、即座に理解したつもりにならず、十分に吟味・考察し、丁寧に受け止めること。相手の言葉も、自分の言葉も、どこか欠けていることを知って、できる限り慎重に聞き、慎重に話すこと。まぁ、時には激烈な言葉が、新たな境地を開くことはありますが・・・、乱発は控えた方がいいですよね、きっと。じゃないと、リアルでもネットでも「炎上」してしまいます。

子ども達の言葉は未熟です。でも、大人同士の言葉だって不完全です。大切なのは、心から傾聴し、吟味し、受け止めること。敦賀教会幼稚園は、そんな丁寧なコミュニケーションを意識し、子ども達と喜びを分かち合い、つらい気持ちも共有する、そんな保育・教育を続けています。

2023年6月　園長だより

2023年6月23日(金)
敦賀教会幼稚園　園長　有岡史季

「主は、わたしたちを造られた」
(旧約聖書　詩編100編3節より・・・6月の聖句)

私の同級生(男性)の結婚式に参列した時の話です。「結婚式」と言っても、私の同級生も牧師なものですから、結婚式は本物の教会の礼拝堂で行い、その披露宴は、同教会の大ホールで行われました。ちなみに、その同級生の花嫁の父親も牧師であり、その会場となった教会は、花嫁の父親が担務する教会であり、結婚式の司式をしたのも、花嫁の父親でした。・・・だから多分、ものすごく費用は浮いたと思います。これも、牧師家庭の特権(？)でしょうか。私の知る限り、他にも自分の娘の結婚式を執り行った牧師はいました。しかし、一体、どんな気持ちで花嫁と、その花婿の真正面に立って言葉を語るのでしょうか・・・。今は、まだ想像できませんね。

さて、その同級生の結婚式は祝福の内に執り行われ、披露宴も馴染み深い教会の大ホールで和気あいあいと盛り上がり、いい塩梅のところでお開きとなりました。その後、ホールに残されたケータリングの料理を大皿に寄せて、これまた冷蔵庫に残された祝酒を持ち出して、親しい友人・家族だけの、ささやかな2次会が催されました。「なんとなく始まった」という、予定されていない2次会です。この2次会の席で、結婚式の司式者であり、花嫁の父であり、会場教会の牧師である、その人は、お酒のせいなのか、疲労のためなのか、少々うな垂れた様子で冷えたピザをかじりつつ、一言「今日、オレは娘を神様に返したんや」と呟きました。失礼なことに、私は、この父親牧師が結婚式で語ったメッセージを何一つ覚えていないのですが、全てを終えた後にポツリとこぼした「娘を神様に返したんや」という一言を、今でも印象深く覚えています。

言うまでもなく、この父親牧師は、花婿のことを「神様」と言ったわけではありません。これはキリスト教独特の理解かも知れませんが、人一人の尊厳を重んじるキリスト教では、自分の子どもについても「神様から今だけ任せられている大切な預かり物」という捉え方をします。神様から命を与えられて、自分のところに生まれて来てくれた子どもを、しばらくの間、独り立ちするまで「お預かりしている」。そして、子どもは、いつの日か、親の手を離れて、自分の希望と選択に基づいて、自らの人生を歩み出します。その日というのは、親の目から見れば「子どもが旅立つ日」であり、キリスト教的に見れば「お預かりした大切な存在をお返しする日」でもあるわけです。「今日、オレは娘を神様に返したんや」という呟きは、大切な存在を「お預かり完了」した父親牧師として、自負と喜びと、寂しさと心残りと、そんな色々な感情が入り混じった、奥深い一言だったのだと思います。まぁ、本人に確認はしていませんが、そんな気がします。

「主は、わたしたちを造られた」という6月の聖句は、親と子どもの関係性を整える上でも有用なのかも知れません。親は子どもに愛情を注ぎますが、でも、それは決して子どもを「自分の所有」とするからではありません。私たち一人一人、子どもたち一人一人、みんな「神様から命を頂いた尊厳ある一個人」です。お互いの愛情が伴う固い絆や、支え合い・励まし合いの中で力強く連帯することはあっても、子どもが親に束縛されたり、支配されたりということは、どうしても避けたいところです。時に、子どもを強く抱え込み、思い通りにしたくなることもあるかも知れませんが、そんな時に「いやいや、私たちに命を下さったのは神様。この子も神様からお預かりしている大切な存在」と思うと、少しだけ力を抜くことが出来るのではないかな、と。ちょっと可笑しな考え方ですけどね。でも、そう思います。

敦賀教会幼稚園は、神様に命を与えられた大切な子ども達を、深い愛情をもって大切に守り育てるご家庭から、さらにお預け頂いて保育を続けています。ここには、本当に大切な大切な子ども達が集まっています。そのことを肝に銘じ、一つ一つの準備、一言一言の声掛け、一回一回の所作を丁寧に整えて参ります。子ども達が安心して過ごし「ありのまま」を大事にされ、愛情をたっぷりと受け取って蓄えることのできる場所であるように。また、子ども達が、喜びを見つけ、自信をもって自分の人生を歩める人に成長できるように。寄り添える幼稚園でありたいと願っています。私たちのところに、大切なお子さんを預けて頂き、本当にありがとうございます。

2023 年 7 月　園長だより

2023 年 7 月 20 日(木)
敦賀教会幼稚園　園長　有岡史季

「主よ、朝ごとに、わたしの声を聞いてください。」
(旧約聖書　詩編 5 編 4 節より・・・7 月の聖句)

この歳になっても、朝が苦手です。夜の方が文章を書いたり、本を読んだりすることが、なんとなく捗る気がして、夜に作業を進めて翌朝に後悔する・・・なんてことを未だに続けています。でも、牧師という仕事をしている人には、そういう人が多いような気がします。聖書のお話を作ったり、研究をしたりするのは、完全個人プレーなので、外部との交流が少ない夜の方が適しているのだと思います。そういえば昔、「私の敬愛する〇〇先生の書斎からは午前 3 時になっても、よく部屋の明かりが漏れていた。大教会の牧師になられてからも、いつも遅くまで聖書の学びを欠かさなかった〇〇先生の姿に、私は尊敬の念を持っていた」と話した人がいましたが、ストレスフリーを志向する若年世代として「そういう尊敬の仕方は良くないなぁ」と感じたことを憶えています。深夜まで無茶して聖書の学びを深めるよりも、毎朝気持ち良く起床して「今日も新しい 1 日をありがとう、神様」と素直に言える方が、よっぽど健康的だし、神様も喜ぶんじゃないかと思います。毎日の夜明けを恨めしく思うのではなく、感謝できるような、そんな牧師になれればいいなぁ、と思いつつ・・・、習慣を変えるのは、なかなか難しいですね。

キリスト教が、今を生きる私たちに与えたものは、多々あります。基本的人権の理解、資本主義や民主主義などの基本制度、社会福祉の考え方や、音楽・絵画の文化などなど。西洋由来の主義思想は、大抵キリスト教が大元になっています。中でも、私たちの生活に欠かせなくなっている暦・カレンダーは重要ですね。少々神話チックなお話で恐縮ですが、聖書の中で最も古い出来事を記している「創世記」によれば、神様は 6 日間で世界を創造し、7 日目に休んで、その休んだ日を「安息日」として聖別（特別なものとして“ 取り分ける”こと）されました。端的に言えば、これが 1 週間の始まりです。神様は世界を作り、昼夜を分けられ、生き物を創造され、そして、安息日を設けて 7 日間というリズムを刻まれた、とキリスト教では考えます。

私たちが当たり前のように過ごしている 1 週間ですが、これは人類史においても、なかなか画期的なものだと言えます。もしも 1 週間の区切りが無ければ、私たちは多分、目処の立たない日々を漫然と過ごすことになったでしょう。メリハリもなく緩急もない。もちろん、1 週間が 7 日じゃ短いとか長いとか、週末だけじゃ休みが少ないとか多いとか、個々人の事情によって、その辺の評価は分かれると思いますが、でも 1 週間というリズムが、私たちの社会生活を円滑にし、頑張るにしても、休息するにしても、ちょうど良い見通しとなっていることは確かかと思います。

そして、教会では毎週日曜の朝ごとに礼拝をしています。毎週欠かさず「礼拝を守る」ことで 1 週間のリズムを保っています。馴染んでくると、この習慣がなかなかクセになると言いますか、心地良く感じられるようになります（時々は面倒と思えることもありますが・・・）。神様が取り分けてくださった日曜日に、忙しない日常から離れて教会の長椅子に座り、ホッと一息、心を落ち着かせ、これまでの 1 週間を思い起こし、これからの 1 週間に思いを馳せる。そんな一連の所作を、側から見ていると「祈っている」という風に映るのだと思います。教会にとって、クリスチャンにとって、この週イチ礼拝での「祈っている」という営みは、とても大切なものです。夏休み中、教会学校はお休みですが、日曜日の礼拝は行っています。子ども達が集まるお部屋もあって、お菓子を食べたり、おもちゃで遊んだり、思い思いに過ごします。ご都合良ければ是非どうぞ。天地創造にまで遡るキリスト教の週イチ朝の習慣をご一緒できれば幸いです。

また、ご家庭においても 1 週間のリズムと、毎朝の気持ち良い目覚めを守れるよう、お過ごしください。「神様、朝ごとに、その日 1 日の願いと希望を聞いてください」と言うのが、7 月聖句のメッセージです。神様に毎朝祈るのは、かなり高レベルな習慣ですが・・・、ただ、掛け替えのない夏休みの 1 日 1 日を満喫できるように、毎朝のひと時を、お子様と丁寧に過ごして頂ければと思います。きっと楽しい計画が詰まっている夏休みだと思います。その計画一つ一つが、神様によって十全に導かれ、たくさんの良い思い出となりますように。心からお祈り致します。

2023 年 9 月　園長だより

2023 年 9 月 15 日(金)
敦賀教会幼稚園　園長　有岡史季

「人はパンだけで生きるものではない」
(新約聖書　ルカによる福音書 4 章 4 節より・・・9 月の聖句)

初めてのアルバイトは、創作居酒屋のランチタイムスタッフでした。中華料理屋で修行した店長が、八宝菜とか麻婆豆腐とかの定食ランチを作って提供していました。そこそこの人気店だったように思います。まかない料理も充実していて、中華丼とかチャンジャチャーハンとかを食べさせてもらいました。美味しかったです。ただ、この美味しいまかない料理を、店主は何故か食べていませんでした。尋ねると「飽きた」んだそうで。なんだか料理人の悲しい性を見たような気がして不憫に思えました。そんな美味しい中華料理に飽きた店主が代わりに食べていたのが、「納豆」と「搾菜（ザーサイ）」でした。本当に、これらと白飯ばっかり食べていました。「これを食べんと日が経たん（毎日の生活ができない）」とまで言っていました。「料理を極めると、逆にシンプルな食事に行き着くのかなぁ」と思ったものです。

話は変わって・・・。大学生の時、実は普通に就職活動をしていました。「まずは大手から」と身の丈に合わない会社の就活ページを回遊する中で、サントリーの「先輩からの声」コーナーに、こんな「声」を見つけました。「私は、自分が商品開発に関わったウィスキーを、365 日欠かさず飲んでいます。風邪の日も、翌朝早出の日も」と。自分の作った商品に絶大な誇りと愛着があることが伝わってくる一方、そこはかとない危うさを感じさせる印象深い「声」でした。この方も、「これを飲まんと日が経たん」というタイプだったんでしょうか。

皆さんも、これを食べないと、あるいは、これをしないと「日が経たない」みたいなこだわりや習慣ってお持ちでしょうか？　私は、お祈りをしないと・・・、というのはジョークですが、やはりしんどいけれど、毎週の礼拝は、仕事でありつつ、染みついた習慣として、欠かせないものになっています。牧師を辞めても日曜日は教会に行っているでしょう、きっと。それは、自分で言うのも変ですが、信仰者として非常に優秀なことだと思います。が、同時にこんな悲劇も孕んでいます。「もし病気や怪我で日曜礼拝に行けなくなったら、どうするの？」という。

「人はパンだけで生きるものではない」という聖句にある「パン」とは、「自分が生きていく上で欠かせないもの」の代名詞です。それには、食料や栄養素という肉体的・物質的なものの他に、精神的・概念的なもの含まれます。仕事、家族、子ども、推し、飲酒、喫食、運動、蒐集、賞賛、激励などなど。私たちの元気を支え、喜びを生み出す物事は多々あります。それらを総じて「生きていく上で欠かせないもの」＝「パン」と表現されています。けれど、この「パン」は、様々な理由で手に入らなくなる場合があります。健康上の理由で、経済的な理由で、あるいは、年代的な理由で、立場的な理由で。今まで自分の元気を支えていたものを失うことがあります。そんな時、「もう、これがないとダメだ、おしまいだ」と思うか、「まぁ、人はパンだけで生きるものじゃないしね」と思うか。この受け止め方の違いで、その後の人生の充実度は大きく変わってくるでしょう。生きていれば、喪失や離別は避けられない運命です。しかし、それでも尚、過ぎゆくことをやめない日々の中で、新しい希望や喜びを見出して歩んでゆくために、今回の聖句は与えられたのだと思います。

もちろん、失った悲しみ、離れざるを得ない寂しさを拭うことは簡単ではありません。一生背負う傷や痛みとして残ることもあります。でも、だとしても、「あなたの心と体を満たすパンは、まだあるよ」と。「もう終わりじゃなくて、これから手に入れに行こうよ」と。私たちに命を与えて、生きるものとしてくださった神様はお考えになり、隣人であるイエス様は、そう教えてくださるのです。

この先、過不足なく喪失を経験し、離別を味わうことになるだろう子ども達にも、「キミの希望は 1 個じゃないよ」という、人生に対する信頼感、生きることのへの期待感を伝えていきたいと思います。「神様がいつも私たちに良いものをくださいますように」。祈ることも大切ですね。

2023 年 10 月　園長だより

2023 年 10 月 31 日(火)
敦賀教会幼稚園　園長　有岡史季

「羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる」
(新約聖書　ヨハネによる福音書 10 章 16 節より・・・10 月の聖句)

10 月 8 日、運動会。今年から、コロナ禍でお願いしていた人数制限を撤廃して、多くの方々にご来場頂きました。本当にありがとうございました。今年は、父母の会の発案・主導により、RCN さんによる動画撮影も行われました。実は、すでに先んじて動画を確認させてもらったのですが・・・、多くは語りません、ただ乞うご期待です！ 素晴らしい動画が仕上がっています。父母の会のお働きにも、本当に感謝致します。

運動会は、幼稚園の恒例行事として毎年開催されています。定例的、恒常的、慣例的と言って良いような在り来りな行事です。でも、毎年、参加する子ども達は、卒園したり、進級したり、入園したりして同じではありません。だから毎年、教師は、その時の学年の子ども達の様子をしっかりと見取り、子ども達全員が参加でき、全員が楽しさを分かち合い、全員が良い思い出として運動会を記憶できるように知恵と工夫と配慮を凝らします。運動会は、園行事としては、毎年のことですが、その実、毎年の演目一つ一つは本邦初公開！ 唯一無二の永久保存版！ ということになります。掛け替えのない、今年だけの、今だけの貴重な一瞬を、皆さんと一緒に見て、分かち合えたことは、本当に嬉しく、有り難いことだと思っています。重ね重ね感謝です。

さて、幼稚園でも、学校でも、保育園でも、認定こども園でも、共通するのは「集団生活」ということです。「個人」が持つ事情や都合に折り合いをつけて、「集団」に適応して生きることを学ぶ場所が園や学校です。敦賀教会幼稚園にも、その学び場としての機能があります。目前の就学に向けて、さらに成人・就業を見据えた下支えとして、社会性を身に着けて「集団」に適応するということは、子ども達にとって欠かすことのできない技術であり資質であると思います。

・・・でも、敦賀教会幼稚園は、そんな社会の要請を十分に承知した上で、子ども達の「ありのまま」を愛するということを大切にしています。「生まれてきてくれたこと」、「私たちのところに来てくれたこと」、「何よりもキミに出会えて嬉しかったこと」という何の技術も資質も必要ない「出会えて一緒に過ごせる喜び」を大切にしています。それが、絶対に、子ども達の「生きる喜び」や「生きる自信」や「人生に対する期待感」に結び付くと、そう信じるからです。

だから、毎年、運動会の取り組みを重ねる時も、「全体の枠組みや、滑らかな流れに、どうやってこの子を当てはめていくか」という、「全体」優先の「個人」の最適化ではなくて、「この子たちが楽しさと喜びを持って取り組むためには、全体をどうすべきか」という、「個人」優先の「全体」の最適化を志向しています。つまり、文字通り「みんなが運動会を楽しむためには、どんな進行にしたらいいか、どんな演目にすればいいか」ということに、教員一同、知恵を絞っているということです。すべての子どもの「楽しさ」や「喜び」を大切にしたいのです。今年の運動会も、その志向性が見られたかと思います。そうした毎年の取り組みが子ども達にとって適切だったどうかについても、しっかりと反省を重ねて、また次年に活かしていきたいと思います。

今月の聖句は、一読すると「一匹の羊が一人の指導者に導かれて、大きな群れに統合されていく」という風に読めるかと思います。「個の埋没と希釈」、「全体性と画一性への扇動」なんて読み方もできるかも知れません。しかし、この聖句を語られたイエス様は、様々な個性、特性、こだわり、事情、背景を持った私たち一人ひとりを、すべて漏らさず受け入れるために、枠組みを広げ、形態を変えて、柔軟に対応することを厭わない方であると、私は思っています。

色々な違いをもった羊である私たちを、色々な違いを尊重しつつ、優しく温かく、配慮をもって導いてゆく羊飼い＝イエス様。敦賀教会幼稚園が基調としているキリスト教保育・教育では、そんなイエス様の姿を思い描きつつ、日々の子ども達との関わりの中に、その実現を願って取り組みを続けています。子ども達が、いつか辿り着く「社会人」になる日。自分の尊さを知り、愛されるに足ることを疑わず、しなやかな自信をもって！ どこへでも足取り確かに歩み出していけることができるように・・・。「今日も、キミに会えて嬉しいよ！」と伝えて参ります。

2023 年 11 月　園長だより

2023 年 11 月 17 日(金)
敦賀教会幼稚園　園長　有岡史季

「地はお造りになったものに満ちている。」
(旧約聖書　詩編 104 編 24 節より・・・11 月の聖句)

私のパソコンには、牧師業開始以来の「説教」原稿が保存されています。「説教」というのは、礼拝で牧師が語る、聖書を基にしたメッセージのことです。決して叱りつけることではなく「聖書の教えを説き明かした言葉(文章)」ということです。毎週日曜日の礼拝説教、ご葬儀の時の礼拝説教、結婚式の時の礼拝説教などなど(実は、キリスト教においてご葬儀も、結婚式も「礼拝」の一形態です)。事ある毎に書いた説教原稿が全部残っています。ざっとファイル検索でさらってみると 550 本ありました。あと、聖書研究の配布資料や、この「園長だより」などの幼稚園サイドの配布資料なんかも含めてみますと、だいたい 1000 本くらいになるかと思います。我ながら結構書き溜めてきたもんだ、と思います。

ところで、これだけの文書ストックがあると、時々、こんなことを思います。「なんか、もう面倒くさいし、昔の使っちゃお」と。そして、正直、使っちゃうこともあるのですが・・・。でも、それでも、なかなか楽にはいきません。説教のストックが 500 本あったとしても、昔の説教って、今の自分にとってしっくり来ないものばかりです。昔のものは、やっぱり、昔のものであって、言い回しの稚拙さが気になったり、発想が貧弱で恥ずかしくなったり、社会状況が違っていて使えなかったりします。「パソコンは、私の作った説教に満ちている。」けれど、精彩を大きく欠いていて、有り難みはほとんどありません。

多分、神様がお造りなったものと、人間が作り出したものの、明らかな違いは、そういう点に現れているのかも知れません。つまり「人間が作り出したもの」っていずれ陳腐化し、廃れてしまい、「なんか、ちょっと違う」となってしまう。牧師の説教に限らず、社会の趨勢、流行も含めて価値が永続することは非常に稀です。もちろん、時代を超えて大切にされている美術・文学・音楽作品は、確かにあります。でも、その大切さの理由から、歴史的価値や希少性やコレクター要素を差し引いて考えてみると、それ自体の素晴らしさを味わうことのできる作品って、実はずっと少ないんじゃないかと。

一方で、神様の創造物とされる自然を、なんでもかんでも無条件に礼賛することはしませんが、でも、太古から造形され続けている佳景に感動したり、四季の移ろいに合わせて表情を変える海や山や川に胸がジーンとしてみたり、抜けるような秋晴れの空に何だか心が洗われてみたり。きっと、そういう人間情緒に響く自然の素晴らしさは、これからも変わることはないと思います。コロナ禍でキャンプ場が賑わったのも、感染対策＋α の自然の魅力があったからでしょう。春に桜を、夏に海を、秋に月を、冬に蟹(？)を堪能する私たちは、永遠の自然大好きっ子です。

聖書は、その冒頭から「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった」(創世記 1 章 31 節)と言って、この世界の素晴らしさを全肯定しています。11 月の聖句は、そんな聖書の考え方に立って、神様のお造りなったものに満ちている、この地上の有様を嬉しそうに眺めています(比喩です)。それは、さっきも書いたように、無条件な自然礼賛ではなくて、どっちかと言うと「私たちの生きている世界は、言うて、まだ捨てたもんじゃない」という期待と励ましを伝えようとしているんじゃないかと思います。

私は、あまり、こうした「牧師(園長)文書」に、戦争とか貧困とか環境問題とか格差とか書きたくはありません。世界の痛いところ、苦いところばかりを見て、悲惨さを煽り「だから人は愚かなんだ」とドヤ顔で指摘して満足するような説教を耳にすることもあります。でも、私は目の前にある、素晴らしいもの、愛しいもの、大切なものを「じゃあ、どうやったら守っていけるのか」と考えて、「まだまだ世の中、捨てたもんじゃない」と言えるようでありたいと思います。

幼稚園で、神様のお造りになったものを子ども達と一緒に楽しみ、味わい、感謝しつつ、そして、明るい未来がやってくることを祈り願って・・・、まずは、楽しいクリスマスの準備に鋭意取り組んで参ります！

2023年号外　園長だより　～クリスマス・ページェント特集～

2023年12月12日(火)
敦賀教会幼稚園　園長　有岡史季

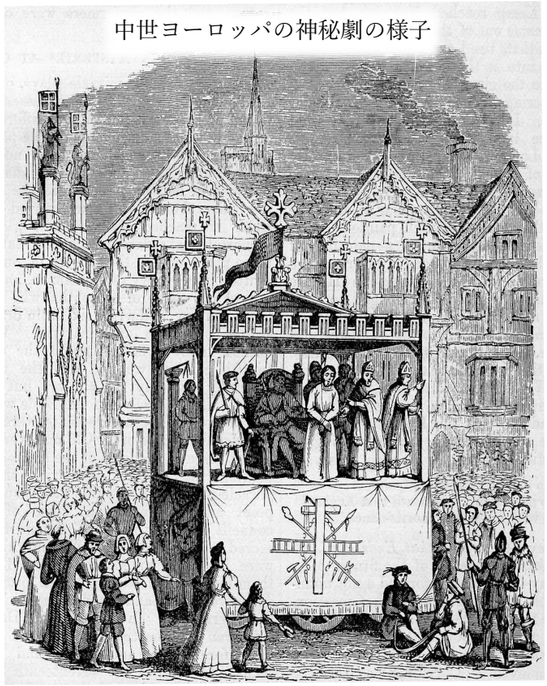
『ページェントを100倍楽しむ！？　12の知識』

日本文化の中では、ほとんど知名度もなく、敦賀教会幼稚園で初めて「ページェント」という言葉に触れる方も多いと思います。そこで表題のような意気込みで、トリビアも交えつつ、登場人物たちの紹介も含めて、ちょっとページェントの解説をしようかと思います。お目通し頂けますと幸いです。

1　ページェントの始まり

そもそも「ページェント」とは、英語で「野外劇」を表す言葉で、キリスト教的な意味合いはありません。私たちの知っているページェントの原型が、野外で上演されていたことに由来する呼称だと思われます。「ページェント」は、日本語では「降誕劇（または聖誕劇、聖劇）」と呼ばれます。キリスト教では、クリスマスのことを「降誕祭」とも言います。

ページェントは、キリスト教が大切にする「聖書」の物語を網羅的に劇化した「神秘劇」と呼ばれる超大作の「クリスマスの部」に過ぎませんでした。しかし、「神秘劇」の大部分が、継承されず忘れ去られていった中で、何故かページェントだけが存続し、今に至ります。ページェントの始まりを「神秘劇」にまで遡って求めるなら、およそ700年の歴史があります。敦賀教会幼稚園で毎年恒例となっているページェントは、その実、江戸時代に成立した歌舞伎よりもずっと古いということです。


中世ヨーロッパの神秘劇の様子

2　ページェントの大まかな内容

ページェントの日本語の呼称が「降誕劇」であることからも、なんとなく想像がつくように、「誰かが生まれたことを伝える劇」ということです。この「誰か」というのが、キリスト教において、神様の子どもであり、世界中の人々を救ってくださる「救い主」または「真の王」と呼ばれる「イエス様」です。ページェントは、イエス様がお生まれになったことを伝える劇となっています。

イエス様について「彼は、ある日、突然生まれた」という出生とはなりませんでした。ページェントの中では深く触れませんが、イエス様の誕生から遡ること800年の間「ダビデの町、ベツレヘムに救い主がお生まれになる」という預言(伝承)があり、2000年前の最初のクリスマスに、その預言(伝承)が成就したと理解されています。また、その「救い主誕生」に際しては、予兆のような出来事が続いたとされ、その不思議な出来事の当事者であるマリア、ヨセフ、ガブリエル、羊飼い、天使、博士、宿屋が、それぞれ大切な意味を携えて、ページェントには登場しています。それではページェントの登場人物たちを紹介していきましょう。

3　不条理を飲み込み祝福を得た、イエス様の母マリアさん

聖書以外の伝承によるとイエス様を身籠った当時、マリアは15歳くらいだったと言われています。現代的価値観・倫理観に当てはめて考えてみると、複雑な気持ちになります。だから、正直、私はマリアの「処女懐胎(性的接触を伴わず身籠ること)」や「不本意な妊娠」について良い印象はありません。ただ「突然神の子の母とされた」ということを、ひとつのメタファー(隠喩)として捉えるなら、女性だけでなく、男性にとっても、このマリアという少女は立派な人だと受け止めることができます。マリアは、自分の願い通りとはいかない人生を受け入れて、不条理を飲み込んで、「神様の御心の通りになりますように」と、全てを神様に委ねる思いで祈ったのです。人生において自分の思い通りにならなかったら意気消沈し愚痴りがちな私たちにとって、マリアはやっぱり高潔な存在だと思います（でも、急に言われたら、こうなりますよね→）

『受胎告知』ロセッティ 1850年

4　「神の子イエス・キリスト」を証明する天使ガブリエルさん

『受胎告知』と呼ばれる場面が、ページェントの冒頭に置かれています。天使ガブリエルがマリアにイエス様を身籠ることを伝える場面です。天使ガブリエルの役割は、マリアが神様の子どもを宿したことを証明することでした。「イエス様は人として生まれながら、神という本質を持っている」という摩訶不思議な信仰的真実を、天使ガブリエルは『受胎告知』を通して伝えています。

5　聖書で唯一、欠点のない男性と言われるヨセフさん

『キリストの生涯』コンラート 1401年

聖書は基本的に男尊女卑の書物です。威張る男性、虐げられる女性、当たり前のように性差別的言動があり、「女性は男性に付き従わなければならない」と臆面なく言い放ちます。聖書を読む上では、そういう不適切な部分を切り分けたり、解釈したりする必要があります。

ただ、そんな聖書の古めかしい世界観の中で、このヨセフという男性は、未婚の母になるところだったマリアを慮り、自分の全てを投げ打って尽くすことを選び、父親の知れない子を迎える覚悟を持ちます(当時、未婚の母は姦通罪の摘発対象でした)。ナザレからベツレヘムに至る長旅では、身重のマリアために奉仕し、慣れているはずのないお産の現場で、彼は、彼のではない子どもを取り上げました。その後も左の絵の通り、ご飯作りも非常に頑張りました。そして、さらに後には、救い主誕生による支配力の低下を恐れたヘロデという王様が、ベツレヘム一帯に「幼児虐殺」の命令を下しましたが、ヨセフ一家は、その危険から逃れるためエジプトへ避難することになります。男ヨセフ、家族を守るための大逃避行です。

6　強くて優しい羊飼いさん

羊飼いが持っている「棒」は、羊のお尻を叩くためのものでも、足腰を支えるものでもありません。夜な夜な襲いくる狼を追い返し、大切な羊を奪おうとする強盗を撃退するための「武器」として使われていました。当時の羊飼いの労働環境は、全然穏やかではなく、常に危険と隣り合わせの厳しい状況にありました。広大な牧羊地、守るべき羊と外敵の多さ、極め付けは、普通に冬は寒くて凍えるという・・・。ゆえに彼らは、かなりの修羅場と忍耐を積んだ屈強な「戦士」としての一面がありました。伝統的なキリスト教神学の理解では、赤ちゃんイエス様のもとに駆けつけた羊飼いを「御子イエス・キリストの守護戦士」と解釈する場合もあります。「私は小さな羊飼い♪」とは言うものの、その実、彼らはとても強い人たちだったのです。「ドン！　ドン！！」という杖の音も、そう思うと、なんだか頼り甲斐のある、力強さを表しているように聞こえてきます。ただ、羊飼い達は、その職業上の特性(休みがない)から、神様への礼拝に参加できない人たちでした（←これ重要）。

7　冒険を運んできた天使さん

クリスマス前の準備期間としてアドベントを過ごします。アドベントの語源は、「アドベンチャー：冒険」と一緒です。クリスマスに至るまでの４週間を過ごすアドベントには、まだ見たこともない、聞いたこともない、ワクワクするような出来事を見つけに行くんだ、という意味が込められています。

「救い主がお生まれになった」という前代未聞の大事件へと、羊飼い達を誘い出し、背中を押したのが天使達でした。普通、夜中に大きな光が空から降ってきたら「UFOか！？」となって怖いと思います。でも、その恐怖を乗り越える「冒険」を経た先に、大きな喜びが待っているんだよ、と天使達は伝えたのです。基本的にキリスト教は、サプラズが好きなのだと思います。

『羊飼いたちにキリストの誕生を告げる天使たち』フリンク 1639 年

8　エリート街道まっしぐら、超優秀だった博士さん

東国ペルシャからやってきた外国人である３人の博士達。彼らの専門は、天文学でしたが、その学問に必要な読み書き計算に熟達した上で、当時の天文学が果たした役割である暦の作成、季節の把握、雨季乾季の予測と、洪水・旱魃への備え、農作物の植え付けから、収穫時期の指導などなど、およそ農耕社会にあっては、超万能な優秀人材たちでした。そんな彼らが、星に導かれて、遠く西の果てのベツレヘムまで救い主を拝みに行くのです。その動機は、一体何だったのでしょうか？

ちなみに、３人の博士には、別の伝承で名前が付けられています。魔術師（マギ）の３名として、メルキオール、バルタザール、カスパールとされています。

あと、博士たちを語る上で重要なのが、彼らが携えてきた「贈り物」です。「黄金」「乳香」「没薬」とありますが、これらが表しているメッセージは、実は、ひかり組のページェントで子ども達が歌う讃美歌の中に語られています。終盤、博士達が贈り物を捧げる場面です。

「♪　我らは来たりぬはるけき国より、星に導かれ野山越えて。

我が持ち来たれる貴き黄金(こがね)を、メシヤの冠の飾りとなさん。

我が持ち来たれる乳香(にゅうこう)ささげて、いと高きみ神、共にたたえん。

我が持ち来たれる没薬(もつやく)ささげて、み苦しみの日に備えまつらん。」

『東方の三博士の来訪』ホフマン 1887 年

３つの「贈り物」には、メシヤ(＝救世主)の冠に用いて偉大なる王権を表すための「黄金」、高貴な方としての威容と神性を醸すための「乳香」、そして、キリスト教信仰において最も重要な「み苦しみ」つまり「すべての罪を負い十字架で死んで人々を救う」ことを見据えた「没薬」という意味がありました。「没薬」とは、遺体の防腐剤のことで、これが暗示するものは「死」なんですね。だいぶとショッキングなお話ですが、イエス様は、お生まれになった、その瞬間から、十字架という苦しみを受けて死ぬことを運命付けられた方であった、ということです。そして、そんな救い主赤ちゃんを、博士達は一生懸命に探し求めて、知恵や知識では解決できない願いを委ねたのです

生成 AI「DALL-E3」による画像 2023 年

9　偉人になれない私たちの代表者、宿屋さん

もし時間があれば、お金があれば、権力があれば、知恵があれば、技術があれば、叶えたい親切や善行って、誰しも一つくらいはあると思います。でも、現実はそんなに甘くない。志はあっても、その実現が叶わず、悔しかったり、申し訳なく思ったりする場合は多々あります。宿屋は、そんな凡人に過ぎない私たちの代表者です。自分の生活を守りつつ、他人の幸せや福祉を願いつつ、その狭間で、時に保身に傾いて、でも善意を捨てきれず、自分の非力を嘆きながら、なお次善策を考えることを諦めなかった・・・、そんな宿屋達です。馬小屋に客を案内するのは、今の感覚ではとても非常識です。でも、「せめて、これくらいは・・・」という思いで、わずかでも親切を果たしたい気持ちは、私たちにもあるはずですね。

10　星で良かった「お星様」

聖書の伝承において、神様が大切なメッセージを伝える際に用いる自然現象はいくつかあります。クリスマスでは「星の輝き」でしたが、他にも「密雲」や「火山」なんてものもあります。非常に人間的視点から言いますと、御子誕生を知らせる目印が「火山」じゃなくて良かったなぁ、と思います。「噴火」の額当てをして歌ういちご組さんになるところでした。

11　礼拝に行かない羊飼いさんと、違う宗教の博士さんが、その日招かれた。

クリスマスは非常識です。救い主が生まれる、王様が生まれると言われて、案内された先は、王宮ではなく馬小屋の中でした。また、最初のクリスマスに招かれたのは、信仰深い信者や祭司ではなく、礼拝習慣がなかった羊飼いと、そもそも違う信仰を生きていた外国の博士でした。この招待客から分かることは、クリスマスは、その最初から「非常にオープンだった」ということです。現代日本のクリスマスと一緒ですね。信仰があるとかないとか、礼拝に行っているとか行っていないとか、知識があるとか、ないとか。そんなことは一切関係なく、クリスマスは、誰でも参加できる、年に１度の嬉しいお祭りなのです。ページェントは、神様の招きの広さと、赤ちゃんイエス様による救い(幸せ)の広さと、分け隔てないキリスト教の懐深さを、ギュッと凝縮して伝えようとしています。

12　神様の子どもは、赤ちゃんじゃないとダメだった。

「なぜ救い主は、力ある青年あるいは壮年の姿で現れなかったのか」という疑問は古来ありました。しかし、お生まれになった救い主が、赤ちゃんの姿であったことにも意味があります。

私たちも、かつては誰もが赤ちゃんでした。子どもでした。助けてもらえないと生きられない存在だったということです。いや、大人になった今でも、助力や励ましが無ければ生きてはいけません。救い主イエス・キリストは、そんな弱く、儚い私たちに寄り添うため、わざわざ赤ちゃんの姿から、この地上ライフを始められたのだと言われています。イエス様は、私たちが人生で味わうであろう、たくさんの苦悩を知っています。馬小屋で生まれるという人生スタートです。その過酷な経験は私たち以上だと言えるでしょう。どんな弱音も、泣き言もイエス様は、共感をもって傾聴してくださいます。貧しい家庭の赤ちゃんとして救い主が生まれたことにも、意味があったということです。

『キリスト降誕』マントヴァ 1515 年

2023 年 12 月　園長だより

2023 年 12 月 21 日(木)
敦賀教会幼稚園　園長　有岡史季

「ひとりの男の子がわたしたちに与えられた」
(旧約聖書　イザヤ書 9 編 5 節より・・・12 月の聖句)

今年も、子ども達が素晴らしいページェント(聖誕劇・降誕劇)を見せてくれました。この「ページェント」を毎年間近で見ていて思います。クリスマスの喜びは、きっと言葉では伝えきれないものなんだろうな、と。救い主が言葉を喋れぬ幼子の姿で現れたことには意味があるのだと思います。赤ちゃんイエス様は、立派な言葉を語る以上に、高尚な教えを垂れる以上に、大切なものがあるんだよ、と、そう教えているのかも知れません。その始まりからして、クリスマスは、言葉という便利なようで、非常に不自由なもの(誤解を生んだり、炎上したり・・・)を超えて、祝われ、喜ばれ、分かち合うことを大切にしてきたのだと思います。

私たちは今年も、教会の礼拝堂で、美しい奏楽の音色や子ども達の歌声が響き合う中でクリスマス礼拝を行いました。この厳かな雰囲気と温かな気持ちに言葉は要りません。今週末 23 日とか 24 日とかになれば、皆さんは各ご家庭で、きっと美味しい料理を食べてプレゼントのことを考えながら過ごすことでしょう。そこにも言葉を超えた喜びがあります。また、大好きな人と優しく触れ合う中で、あるいは、仲の良い友人たちと楽しく笑い合うことで、このクリスマスの喜びは人から人へと伝わっていきます。この喜びに詳しい説明を加えるのは無粋というものです。そこには言葉以上の喜びが生まれます。言葉では伝わらない感情の高まりがあります。そんな風にクリスマスをお祝いすることを、私たちは誰から教えられるでもなく知っていて、そういうお祝いを続けてきたのです。ちょうど、言葉を喋ることのできない幼子を囲んで、ただ、その姿の愛らしさに、ただ、その場に満ちる幸せな空気に、羊飼い達や博士達が感動し、喜びにあふれたように、です。今を生きる私たちも、言葉を超えたところで、このクリスマスの喜びを分かち合うことを続けてきました。

教会という場所は、言葉による伝道と宣教を行うところです。ゆえに、どうしても小難しい話が多くなってしまいます。でも、教会が、最も大切にしているのは、この言葉の先にあるものです。それは、理屈の通った説明を聞くことで、伸ばした指先に触れるくらいには近づけるものですが、しかし、それをしっかりとつかみ取るためには、言葉では言い表せない不確かなものを信じる気持ちが必要です。「（今から約 2000 年前）、ひとりの男の子がわたしたちに与えられた」。そんな言うだけなら簡単な、この信仰的事実をつかみ取るのは、その実、全然簡単ではありません。だから、まぁ、信仰って、ちょっと難しいですよね。考えるよりも、タイミングと勢いの方が重要かも知れません。

ただ、忘れてはならないのは、そういう信仰云々とは関係なく、私たちはクリスマスの喜びを感じているということです。形はどうであれ、正しい、正しくないという人間的価値観に基づく論争はどうであれ、神様の招きは全世界に及び、今年も信仰のある・なしを問わず、多くの人がクリスマスの日を喜び祝うでしょう。皮肉な言い方をするなら、「クリスマスなんて関係ねぇわ」という人でさえ、クリスマスという日を無視できず、その日を迎えることになります。

多分、日本における、このクリスマスの知名度そのものが、神様の招きの広さなのだと思います。私たちは、すでにここに住んでいると言うだけで神様の主催するお祝い会に招かれているっていうことです。望むと望まないを問わず招待状は届いています。あとは、年に 1 度の、この祝祭を大切な人と、親しい仲間と、温かく嬉しい思いを持ち寄って過ごせば、そこに神様の救いと恵みが実現するのだと、私は思います。あと、敦賀教会も皆様の来訪をお待ちしています。

◇ 12 月 24 日(日)　午前 10 時 15 分～：クリスマス礼拝　　午後 7 時～：燭火賛美礼拝　◇

クリスマスは、他の誰でもない、これを読んでいるお一人お一人の幸せと救いが約束されたことを喜ぶお祭りです。あなたのためにイエス様がお生まれになったことを喜び祝う日であることを忘れないでいて欲しいと思います。どうか、今年のクリスマスは、あなたにとって心から楽しめるひと時となりますように、心からお祈り致します。そして、今年も大変お世話になりました。

2024年1月　園長だより

2024年1月26日(金)
敦賀教会幼稚園　園長　有岡史季

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」
(新約聖書　ヨハネによる福音書15章5節より・・・1月の聖句)

聖書は、ぶどうが好きです。と言いますか、聖書を書いた時代の人々は、ぶどうが好きでした。そのまま食べることも好きでしたが、多くの場合、ワインとして楽しんでいたようです。

昔から教会でも「聖餐式」という儀式を行なっています。「聖餐式」とは、ワインとパンを飲食する儀式です。何のためになのかと言いますと、イエス様の血と肉体を、自分の身体に受け入れるためです・・・。ちょっと怪しげな話ですね。聖餐式は、ワインをイエス様の血であるとして、パンをイエス様の肉体であるとして頂きます。それは聖書の中で、イエス様ご自身が、そのように説明・勧告されたからですが、後世、「人の血と体を食っている」という表面的な情報だけが一人歩きして、キリスト教が食人宗教と誤解された歴史があることは、お定まりな展開だと言えます。

キリスト教では、イエス様の言われた通り、ワインとパンをその身に受けることで、いつもイエス様を近くに感じ、いつもイエス様に守られているという信仰を新たにしています。敦賀教会でも毎月最初の日曜日と、イースター、ペンテコステ、クリスマスの三大祭日に聖餐式を行います。敦賀教会が属している日本基督教団の決まりでは、原則、この聖餐式に参与できる人は、クリスチャンのみに限っていますが、他の教派・教団では、クリスチャン・ノンクリスチャンを問わず聖餐式に参与できるところもあります。ただ、飲酒運転やアルコール依存症などを踏まえて、今では、ワインではなく、ぶどうジュースを用いるところが増えてきました。敦賀教会も、ぶどうジュースですね。でも、やっぱり、ぶどうであることは大切で、そこは堅守しています。キリスト教にとって、ぶどうは特別な存在です。人々の救いや幸せを象徴したり、裁きや罰を暗示したりします。ただ、その根底にある古来の認識は、きっと「ワインってやっぱり欠かせないよね」という、日々の生活に根差した有り難みと感謝の気持ちなんじゃないかと思います。

「わたしはぶどうの木」と仰るイエス様も、「その枝である」私たちに対して、深く断ち難い繋がりがあることを伝えようとしています。生活に根差したぶとう(酒)が、人々の生活を豊かにしてきたように、イエス様も、人々の生活に関わり、繋がることで幸せを約束してくださっている。この1月の聖句は、そんな風に理解すると良いんじゃないかと思います。

ところで、「イエス様に繋がると幸せになれるよ」というメッセージは、放っておくと「繋がらないと幸せになれないよ」という、カルト的メッセージに容易に発展します。そこは気を付けないといけません。イエス様は、そんな心が狭く、ケチな方じゃあないんだよ、と。聖書を読んでいますと、ノンクリスチャンや非信仰者について、とても厳しいことが書かれている箇所があります。そんな人は「外に投げ捨てられて枯れる」とか「火に投げ入れられて焼かれる」とか、ですね。こういう残酷な言葉は、昔、キリスト教が大きな迫害下にあって、命さえも危ぶまれる状況で、自分たちの正義と悔しさと憎しみを込めて書き残した「悲痛な叫び」の一例です。今の穏やかなキリスト教が、当時の激情を継承し、憎しみを真に受ける必要はありません。

いつの時代も、イエス様に繋がることを拒む人がいるのは、当然です。ただ、その拒絶が、イエス様からの一方的な愛を停止させる条件にはなり得ないことは、少々、鬱陶しいですが、了解するしかありません。イエス様は、すべての人を愛してくださっています。敦賀教会幼稚園の子ども達、だけじゃなく、教職員も、保護者の方々もみんなです。むしろ、ピンポイントで子ども達だけを愛するイエス様というのも、なんか気持ち悪いじゃないですか。

確かに一方的な愛は、重たくて不快なものです。でも、イエス様の愛は、「無償の愛」「見返りを求めない愛」「自分よりも他者を優先する愛」と言われています。そうだとしたら、まぁ、受け取っておいても、別に損はないかと思います。

祈ることで繋がり合えるイエス様の愛と優しさが、子ども達の日々の安心と確かな自信を支えてくださいますように。そう願いながら、キリスト教保育・教育を続けています。

2024年2月　園長だより

2024年2月29日(木)
敦賀教会幼稚園　園長　有岡史季

「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」
(新約聖書　ローマの信徒への手紙12章15節より・・・2月の聖句)

一部の介護福祉の領域で、「キリスト教的ホスピタリティ」という言葉があるんだそうです。キリスト教を信じるわけじゃないんだけど、キリスト教が大切にしてきたホスピタリティ（配慮）から学んで、介護福祉の現場に活かそう、ということなんだとか。キリスト教の本家本元と致しましては、ご関心を頂いていることに感謝する一方で、もうちょっと踏み込んでもらえると嬉しいのになぁ、と正直に思います。

ところで、この「キリスト教的ホスピタリティ」では「ケアをする」ということの意味ついて、こんな風に考えているそうです。まず、「ケアをする」には2通りの意味があって、1つ目は、「看護する、世話する、面倒をみる、管理する」ということ。2つ目は、「気になる、気を揉む、心を痛める、心配する」ということです。実は、この1つ目と2つ目の意味の間は、大きな違いがありまして、1つ目の意味である、例えば「世話をする」と言った時、そこには「世話をする人」「世話をされる人」という異なる2者があるわけですね。一方で、2つ目の意味である、例えば「心を痛める」と言った時、それはケアをする人も、ケアをされる人も等しくどちらも心を痛めるわけです。思いや経験を共有し、一緒に喜んだり、泣いたりするということです。

介護福祉の領域でも、保育・教育の領域でも、「世話をする」という働きは非常に大切です。「世話をしない」介護や福祉や保育や教育って、多分あり得ないですよね。ただ、そういう実際的な要請がある中で、でも、心得としては、いつも「一緒に気を揉む」「一緒に心を痛める」という寄り添いを忘れないでいたいと思います。人を相手にするお仕事の場合、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」という聖書の御言葉は、とても重要な指針となるでしょう、たとえ教会じゃなくても、ですね。

幼稚園の先生を含め、人を相手にするお仕事のことを「感情労働」と言うそうです。肉体労働は、自分の身体を資源として働くことで、「頭脳労働」は、自分の知性や知識を資源として働くことですから、「感情労働」というのは、自分の感情を資源として働くということになります。「感情って資源なの？」とも思いますが、相手が大人であれ、子どもであれ、その人の気持ちに「寄り添う」なら、それは、つまり自分の気持ちをコントロールして、「自分のものではない感情に、意識して心を合わせていく」わけですから、当然、エネルギーを使います。エネルギーを使うと言うことは、何らかの資源を消費している、ということです。

「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」という今月の聖句は、相手と自然に感情が同調して一緒に盛り上がる、というものではなくて、「自分のものではない感情に、意識して心を合わせていく」ことなので、それは、とても疲れるものだと言わざるを得ません。けれど、そういう配慮って、人間関係を円滑にしていく上で、避けては通れないものであるとも言えます。もちろん、あんまり、それをやり過ぎると疲労困憊してしまいますが。

イエス様という方は、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く」ことがお出来になる方でした。誰よりも人の気持ちに寄り添うことを諦めない方でした。クリスマスの日、イエス様が飼い葉桶に寝かされていたのも、「それくらい不遇で貧しい人の気持ちに寄り添うためだった」と解釈されています。新約聖書にあるヘブライ人への手紙6章15節に「（イエス様は、）わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです」と書いてありまして、良き理解者、良き共感者としてのイエス様のお姿を思い描くことができます。

キリスト教主義の幼稚園では、そんなイエス様のお姿に倣おうと努めています。完全に真似できるわけじゃありませんが、そうありたいという願いは忘れていません。目の前の子ども達一人一人の気持ちに寄り添うこと。一緒に喜び、一緒に悲しみ、その喜怒哀楽を受け止めていくこと。そうすることで、子ども達が今日も安心して過ごせるように。愛されている実感を持つことができるように。祈りつつ、教職員一同、励んでいます。

2024年3月　園長だより

2024年3月18日(月)
敦賀教会幼稚園　園長　有岡史季

「主よ、あなたの道をお教えください」
(旧約聖書　詩編86編11節より・・・3月の聖句)

キリスト教には、「召命」という言葉があります。これは「自分の意思ではなく、神様に呼び出されて、働きを与えられること」という意味を持っています。牧師は、漏れなくこの「召命」を経験して、その職務についています。つまり、言い換えるなら、牧師って、自分で望んで、やりたくて、牧師をしている訳じゃないっていうことです。他にもやりたいことがあって、違う夢を持っていて・・・、でも、神様によって呼び出され、導かれ、騙され(？)、用いられ、ここにいる。それが、ある意味、牧師の偽らざる一つの側面であるということです。不思議なもんです。

カトリックの有名な司祭である晴佐久昌英神父という方が、こんなことを言いました。「私は、消去法の召命で、ここにいる」と。彼の持論では、あらゆる選択肢を絶たれて、あれもできない、これもできないという現実を突き付けられた先に、消去法的判断と強制によって神父という生き方を選ばざるを得なかったのだ、とのこと。

私たちは、あれもできる、これもできる、という可能性の豊かさを尊ぶ価値観を持っています。もちろん、可能性は少ないよりは多いに越したことはありません。それは間違いない。だから、子ども達には、できるだけ可能性が残された未来を整えてあげたいと願います。

ただ、人生を過ごしていれば、何は無くとも可能性ってどんどん減っていくものですよね。独身から家庭を築くに至ること然り(一人暮らしが何だかちょっと恋しくなったり・・・)。社会的な責任の増加に伴い品行を正す必要が生じること然り(就職昇進や交際結婚を見据えてSNSを整理したり・・・)。単純に加齢によって若い頃平気だったことが今はできないこと然り(天下一品のこってり大盛とか、もう無理・・・。そもそも敦賀に無いところからして可能性の喪失ですが)。そういう可能性の減少・喪失について、「まぁ、そういうもんだよ」と言って未練を残しつつ嘯いてみたり、あるいは、巧妙に見て見ぬふりを貫いてみたりするのも、欠かせない処世術かも知れませんが、いっそのこと、「それは、きっと主なる神様が、もっと素敵な進むべき道を示してくださっているんだ」と思ってみるのもアリなんじゃないかな、と。

「主よ、あなたの道をお教えください」。これは、自分の知り得ている「道」ではなく、主なる神様の示される「道」を知りたい、という祈りの言葉です。重要なのは、そう祈る本人は、別に捨て鉢になっているわけではありません。「もう、神様が好きに、どうにでも、どうぞ」という投げやりな心境ではない。むしろ、自分がもっと幸せに、もっと豊かに暮らすためには、何が必要なのか、「わたしの知らない、あなたの道を教えて欲しい」ということです。

自分の幸せや豊かさを願う中で、多くの可能性を見せ付けられつつ、でも、その多くの可能性を取りこぼしながら生きて行かざるを得ない私たちにとって、程度の知れている「わたしの道」ではなく、全知全能の神様が示してくださる「あなたの道」って、ちょっと魅力的に見えないでしょうか。何か行動を起こす時に「これは神様の道だ」と思うと、ちょっと勇気が湧きませんか。

・・・あえて言いますと、今日、卒園していくひかり組の子ども達も、これから歩む長い人生の中で、きっと挫折を経験します。夢破れるということを少なからず味わうでしょう。理解されず、また理解できず苦しむこともあると思います。葛藤に沈み、決断を強いられ、それらを乗り越えるための勇気を希求することもあるかも知れません。そんな局面において「主よ、あなたの道をお教えください」という祈りの言葉が、どうか柔らかく、でも力強く心に響きますように・・・。「道は、一つじゃないよ」と。「諦めるにしても、諦めないにしても、進むべき道は、自分が思っているより、もっともっと多いんだよ」と。「だから、大丈夫だよ」と。

卒園していくひかり組さんが、願わくば順風満帆の日々を送れるよう祈ります。と同時に、たとえ逆風逆境に置かれたとしても、なお進むべき道が開かれていくことを心から願っています。教職員一同、たくさんの愛と、たくさんの声援と、たくさんの信頼をもって、ひかり組さんの、とっても大きくなった頼もしい後姿を見送ります。寂しいけれど、でも、神様の恵みと祝福が、いついかなる時も豊かに注がれますように！　本当に、心から、御卒園おめでとうございます！！

2024年3月　園長だより

2024年3月21日(木)
敦賀教会幼稚園　園長　有岡史季

「主よ、あなたの道をお教えください」
(旧約聖書　詩編86編11節より・・・3月の聖句)

私の地元は、岡山県勝田郡勝央町豊久田というところです。「平成の大合併」を免れ、未だに「郡」を名乗る孤高のド田舎です。Googleマップで見たら分かります。ほぼ山と田んぼです。現在は統廃合されて無くなった、卒業した小学校へは片道1.5㎞を徒歩通学していました。決して敦賀市内の徒歩通学児童の大変さを知らないわけではありませんが、ただ、山と田んぼしかない田舎道の1.5㎞は、とても長く感じて苦痛だったことを覚えています。

あまりにも苦痛だったので、集団下校しない日は、だいたい道草ばかりでした。小川に入って魚や蟹を捕まえる。(おそらく)自生している柿や柚子を取って食べる。カブトムシやクワガタが採れる木を巡回する。小川を遡上して帰る。田んぼのあぜ道や林道を通って帰る・・・。そして、定期的に「お子様には、ちゃんと通学路を通って、寄り道をせずに帰るようご指導ください」という手紙が保護者に届く、というところまでがルーティンでした。ある日、学校の先生から「通学路じゃないところで、事故に遭っても保険は出ないからな！」と叱られて、当時は、よく意味が分かりませんでしたが、後になって調べたら、学校が指定した通学路での事故は、学校の掛けた保険が適用されるとのことで、「あぁ、だから、あの時、先生怒ってたのかぁ」と。確かに、小川を遡上しながらの下校中に怪我をしたから補償しろっていうのは、まぁ、無茶な話ですよね。「ちゃんと通学路を通って帰りましょう」と指導する側でいたいと思います。

ただ、それでも思うのは「路」じゃない「道」に、新しい発見があったなぁ、ということです。「路」という字には「予め定められた」という意味がくっついて来るように思います。通学路しかり。通勤路もそうですね。線路【レール】は正にそう。また、経路と言えば、ある基準や目的によって規定された行程という意味が付随してきます。リスク管理において「予定」と「安全」が不可分なことを思えば当然です。一方で「道」は、道草、獣道、寄り道、裏道、近道、回り道、道楽などなど。なんだか自由で、人の定めた規定に縛られない、それ故に、ちょっと冒険的な印象が伴っているように感じられます。

「路」と「道」の違いを、なんとなく考えると、「路」は目的に応じて人が定めたもの、「道」は成り行きで見つけたもの、気付けば目の前にあるもの、という切り分けができるんじゃないかと思います。詳しい字義解説を、専門家に聞いてみたいところです。

実は、私は人生においても寄り道をしてきました。高卒後に1年留年。大卒後2年就業期間があって、大学院に入り、牧師の卵になりました。その都度、悩み、悲しみ、嫌な思いも沢山経験し、ただ、同じくらい沢山の励ましと助けをもらって生きてきました。「進路」という発想から考えると、とても非効率的で非合理的な行程だったかと思います。でも、「道」はありました。私の進むべき道は、自分や社会の常識を超えたところで織り成され、整えられ、気付けば目の前に開けていました。・・・と、まぁ、そういう世界観、人生観もあるということで、健康サプリのＣＭみたいに「※個人の感想です」的な、卑小な一例としてご理解頂けると幸いです。

3月の聖句は、「わたしの道」ではなくて「あなたの道」を教えてください、と言います。「わたし」という限られた存在が思い付く道ではなく、なんでも知っている主なる神様の編み出された道を教えてください、と。きっと、それは常識に照らしてみれば、にわかには受け入れがたく、選び取るには、かなり勇気を要するものかも知れません。だから、順風満帆の時は「わたしの道」を素直に行く方が精神衛生上、絶対におススメです。でも、「わたしの道」が頓挫した時、それでもなお「あなたの道」が残されていることを忘れないでいたいと思います。「道」って案外沢山あります。裏道、近道、回り道。神様しか知らない「道」が随時、舗装整備中です。

年度が変わります。新しい1年間が始まります。まだ誰も知らない2024年度です(当たり前)。しっかりと予定を立てつつ、でも、その時々に与えられる喜びや発見を見逃さずに、ちょっと寄り道もしながら、楽しい幼稚園を続けていきたいと思います。今年度も、幼稚園の働きをお祈り、お支え頂き、ありがとうございました。また4月から、どうぞよろしくお願い致します。